

中国南北朝期における金剛心義の展開——成実涅槃学の研鑽から地論へ——

魏 藝

一、はじめに

本稿は成実涅槃学^①の研鑽から、地論学派の淨影寺慧遠（五二三—五九二）撰『大乘義章』まで、金剛心義（金剛三昧または金剛喩定）^②の理解がいかに発展したのかという一側面を考察するものである。なお、金剛心義を扱う上で特に注目したいのは、金剛三昧に入る段階、すなわち金剛心位は菩薩であるか仏であるかという議論についてである。それが大乘仏教の修道論の一端を解き明かすためには極めて重要であり、中国ひいては東アジアの諸学派・諸師にとっては必須の研究課題の一つである^③と考える。しかし、南北朝の金剛心義についての先行研究はほぼ皆無に等しいのである^④。

中国南北朝期において、地論教学に先行する『大般涅槃經』と『成実論』などを共に研鑽する諸師の教学は解明されていない点が多い^⑤。本稿で扱う宋・齊時代に活躍した天安寺僧鍾（四三〇—四八九）や上定林寺僧柔（四三一—四九四）などの諸師の著述や講義記録などがほぼ散逸しているため、彼らの教学の全体像はまだ描かれ

ていない。また、『藏外地論宗文献集成』とその『統集』^⑥のような入蔵されていない地論文献の翻刻・整理は行われたが、内容の考察はまだ十分なされておらず、研究の余地が多にある^⑦。この論文では紙幅の都合により、その全ての文献に対する十分な検討はできない。そこで、本稿では①南地の文献として、成実涅槃学の敦煌文献羽二七一『不知題仏経義記』（擬題、以下『義記』と略称する）^⑧、②北地の文献として、北魏洛陽期（四九三—五三四）の地論文献P二九〇八『教理集成文献』（擬題）、③慧遠の『大乘義章』を用い、金剛心義の展開に着目することで、断惑証理（煩惱を断伏し真理を見極める）の修道論の一端を明らかにすることを目指す。

①南地の『義記』には僧鍾と僧柔という二師の「金剛心義」講義録がある。一方、②北地のP二九〇八にも金剛心義の章が立てられている。池田将則氏は、②北地のP二九〇八の内容には『大般涅槃經集解』（大正三七所収、一七六三番）に集成されている南地系の『涅槃經』教理学の影響が顕著であると指摘している^⑨。筆者は②北地のP二九〇八に取り入れた南地教学が①南地の『義記』にもある

と考えている。^⑩そこで、本稿ではまず、①南地の『義記』と②北地のP二九〇八との金剛心義の比較を通して、北地のP二九〇八に取り入れられた具体的な南地教学の要素を提示する。次に③『大乘義章』の金剛心義を抽出し、①南地の『義記』と②北地のP二九〇八の内容を関連させることで、③『大乘義章』に至るまでの金剛心義の形成と変容も把握できよう。

二、南北両地を繋ぐ金剛心義

まずは、前提として①南地の『義記』と②北地のP二九〇八の金剛心義について概観したい。①南地の『義記』巻第四には「天安僧鍾法師解金剛心義」と「上定林僧柔法師解金剛心義」とがある。内容は講師の講義部分と問答部分の二つから構成される。前者は僧鍾が講師であり、問者は南潤寺慧隆、靈基寺曇織、天安寺僧表の三師である。後者は僧柔が講師であり、問者は常樂寺慧珍、冶城寺智順、冶城寺智秀、靈曜寺僧盛、靈曜寺慧令、冶城寺光泰の六師である。^⑪ここでは、講師である僧鍾と僧柔について触れる。

僧鍾については、『高僧伝』には次のように述べられている。

鍾妙善『成実』『三論』『涅槃』『十地』等。後南遊京邑止于中興寺。
(大正五〇・三七五下)

これを見ると、僧鍾は『成実論』『三論』『大般涅槃經』『十地經』

(鳩摩羅什訳『十住經』)などを得意として、後に南の都(建康)に遊学し、中興寺に住したことがわかる。^⑫しかし、僧鍾伝に天安寺の記述が見られない。実は『高僧伝』巻七義解四「釈道温伝」(大正五〇・三七二中―下)には、大明四年(四六〇)、中興寺を天安寺と改名したことが述べられている。^⑬したがって、四六〇年以後に僧鍾は天安寺僧鍾という肩書で金剛心義を講義したことになる。

次に上定林寺僧柔に関しては、『高僧伝』巻八「義解五」(大正五〇・三七八下)に立伝されている。周知の通り、智顗説『妙法蓮華經玄義』には、僧柔・慧次二師の五時教判が引用されている。^⑭また、『出三藏記集』によれば、僧柔と慧次は竟陵王蕭子良の命令に応じ『成実論』を講義したことも知られている。^⑮

次いで、②北地のP二九〇八についてである。文献の撰述者は不明であるが、北魏洛陽期(四九三―五三四)の地論文献とみなされている。内容には金剛心義・四依義・五住地惑義などの各章が立てられた。主に『涅槃經』『成実論』『勝鬘經』の基づく主題である。^⑯

これは北地の成実涅槃學も反映しているといつてよい。金剛心義は章(金剛心義の定義)と釈(無惑金剛・有惑金剛)に分けられている。

また、金剛心については金剛心義のみならず、四依義と相統義にも論じる。なぜかという点、金剛心義・四依義・相統義は断惑証理の修道論を構成するために不可欠な論題だからである。四依義は南本『大般涅槃經』「四依品」に基づく四果(須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢)と、菩薩の十地との関係を論じるのである。^⑰相統義は菩薩修

行の各段階において煩惱を断伏し、真理を見極め、無漏智を積み重ねて、無明衆生から大明種智へ転換するという成仏論である。^⑮

さて、南北両地を繋ぐ金剛心義の共通点について二点から検討する。一点目は最後の学心を金剛心とみなす見解である。まず、①南地の『義記』の僧鍾説と僧柔説を確認する。

僧鍾説…夫金剛心者、蓋是十地之終極、窮学之明解也。将顕之有摧累之功、故寄金剛為其名也。此心者、体有進求謂之為学、性是知慮名之為心、在境不乱称之為定、有所決了亦謂之智。既是窮学之照起則符理、以与理冥符故、能感智貴之。有感種智尽累之功故、取金剛能摧之義、寄目其体為金剛心也。

(羽二七一・二〇)

傍線部の要点は、金剛心は十地の終極（最後の極まる段階）であり、学を窮める明解（智慧）であることである。一切種智を得得し累（煩惱）を尽くすはたらきがあるから、金剛の能摧（煩惱を破碎するはたらき）という意味で、その心体を金剛心と名付ける。

注目すべきは、金剛心が十地の終極である点と、金剛の「能摧」の義を煩惱の除去するはたらきに喩える点である。そして、僧柔も同じ見解を提唱している。

僧柔説…夫聖解虚微、涉用難弁、故寄之近事、以彰其美。金剛

者為物堅説、能不摧故、借辟菩薩最後学心治惑之功也。

(羽二七一・二二)

傍線部は、金剛の堅さの譬喩（能不摧）を用いて、最後の学心を煩惱除去のはたらきになぞらえている。ここでは、金剛心が菩薩の最後の学心とされているのだ。注意すべきは、僧柔と治城寺智順との問答では「金剛是一念」（羽二七一・二二）と述べられていることである。これを合わせて考えると、金剛心は最後の学心の一念とみなしても大過ないであろう。

一方、②北地のP二九〇八の金剛心義はどうであろうか。

前略…観空正解、能斬煩惱、惑不能沮、故称金剛。a若就理而言、得金剛名者、要是如来一人。是以経言、金剛喻者是第一義智。『涅槃』中言、如来身者、是金剛身。若爾、b今所以就学地終心、制金剛之名者、為欲引於下流、使自不絶。以是義故、就十地最後一念解心、作金剛名。

然金剛之名、就喩為況云何。世之金剛、有其二義。一、能摧外物、而体無損。二、沙磧不礙、徹到金剛方止。^⑯c此之最後学心、亦有二義。一者能碎惑体、不為惑沮。d二者此心所觀、徹到初住所觀。具此二義、故称金剛。

(『藏外地論宗文献集成』・一七三一―一七四頁)

冒頭では、空を観ずる正解（智慧）はよく煩惱を断ち切り、惑によつて妨げられることがないので金剛と称する、と定義されている。傍線部の要点は二つにまとめられる。b、学地の終心を金剛の名と制するというのは、下流の衆生（機根の低い者）^②を導き、仏道を途絶させないため、十地の最後、一念の解心を金剛と名付ける。c、金剛は最後の学心であり、煩惱を除去するはたらきがある。

このように、最後の学心の一念が金剛心であるという点、金剛の比喻を用いて煩惱を除去する金剛心のはたらきになぞらえるという点において、南地の『義記』と北地のP二九〇八の見解は一致している^③と知られよう。後述するが、『大乘義章』にも大乘説として理をきわめる十地の最後一念が金剛であると論じられている。というわけで、最後の一念という金剛心説の素地は南地の成実涅槃學にあるといつてよい。

一方、波線部は南地の金剛心義より進展した内容である。その大意を要約すればa、理としていえば、如来（果地）のみを金剛と呼ぶ、そのことは『勝鬘經』の「金剛喻」というのは、第一義智である」（大正二・二二一上）と、『涅槃經』の「如来身」というのは、金剛身である」（大正二・三八三）という二文を根拠とする。波線部dは、金剛心の観ずる所は初住（十住の第一段階である初発心住、因地）の観ずる所にも通達すると主張している。

以上のことから、金剛心位は十地の最後の学心であるという一説から、金剛心位は如来（円満の仏果）や初発心住（十住の最初段階）

であるという二説を加えた三説となる。

南北両地における金剛心義の共通点の二点目は金剛が有惑であるか無惑であるか（金剛心に除去されていない煩惱があるかどうか）についてである。この議論はアビダルマ教理学に基づいていると論証したい。①南地の『義記』に以下のような問答がある。

南潤慧隆問曰、金剛為理必以能摧為義。而言有闍未尽、仏智方除者、便是有所未摧、何得謂之為金剛也。〔僧鍾〕答曰、雖有闍未尽、而是除累故得為能摧也。〔羽二七一・二一〇〕

慧隆は、「理として、金剛は煩惱を除去するはたらきを意味するが、金剛心にも滅尽されない闍があり、仏智によつて除去されるならば、どうして金剛といえるのか」と問うている。そこで僧鍾は、「滅尽されない闍があるといつても、累を除去するはたらきがあるため能摧の義となる」と答える。傍線で示したように、問答の二者は共に金剛心に闍、いわゆる仏智で滅尽する煩惱が残るという。ここでは、金剛と仏智のそれぞれが断ち切る煩惱を累と闍、という区別を付けさせようという意図が読み取れる。「金剛心義」では金剛心で断ち切る煩惱の説明が明瞭ではない。ところが、同文献の卷二「中寺法安法師解十地義」の霊味寺宝亮（問者）と法安（答者）の問答が参考になる。

又問、若以根本未尽枝条猶起者、則金剛心時、「称起」方尽耳。答曰、如彼波依水、必在洋溢之時。川竭池涸、雖地中余澤、不能起浪。八地以上、雖有無智（＝知）、事同地深、不復能生「称起」之惑。故金剛心時、無復可断也。（羽二七一・一二）

法安の「十地義」に説く煩惱論については、既に別稿で論じた。^②

法安は、『勝鬘經』に説かれる見一処住地・欲愛住地・色愛住地・有愛住地の四住地惑を称起（現行の煩惱、心と結合していない煩惱）とみなし、無明住地惑（無知）を性障（本性としての障、心と結合する煩惱）とみなしている。傍線部で示したように、第八地（不動地）以上には、無知（＝無明住地）が残っても湿気のようなものであり、称起（＝浪のような四住地惑）が生じないので、金剛心には断ずるべき惑がもうないと説明できる。

法安は、①南地の『義記』巻一「天安僧鍾法師解法身義」の講義に問者として登場し、僧鍾（答者）と直接交流したことが確認できる。^③したがって、法安の説いた煩惱論が僧鍾に共有されていたと考えられる。そうであれば、僧鍾のいう「除累」が称起（＝四住地惑）を除去し、残る闇が無明住地惑であろうと推測されよう。

そして、冶城寺智順（問者）と僧柔（答者）は次のように問答している。

又問、金剛心時、有惑不也。若解時無惑、則不得無功。若解時

有惑、則解不滅惑、不治道也。答曰、言解時有惑者、乃是成就過去・未來、不並有也。

又問、若成就過去未來為有者、則未解時有惑、解時亦有之。既二時俱有、云何以此解為治道也、答曰、故是相統中得有治惑力、非解生時也。（羽二七一・一二）

智順は「金剛心の時に惑があるかどうか」を問うている。それはもし解の時に惑がなければ、煩惱を対治するはたらきがないことになり、もし解の時に惑があれば、煩惱の対治は治道でないことになるからである。これに対して僧柔は、「過去と未來それぞれを成就する惑は同時には存在しない（不並有）から、矛盾は生じない」と答えた。興味深いことは、僧柔は過去を成就する煩惱を異体障とし、了ぜず所がある道心を妨げる煩惱を自体障とするという、無漏道の二種の累を述べているということである。^④ここでの自体障・異体障は後の地論文獻P二九〇八に述べる即心の惑（＝自体惑＝無明住地）・異心の惑（四住地惑）と同一視するかどうかについて、詳細な検討が必要である。ともかく、心に自体と異体の煩惱の使い分けは、②北地のP二九〇八に先行する見解が注目されるべきであろう。

問答の続きは、「過去と未來に〔それぞれの〕惑があるならば、既に未解と解の二つの時に惑があるので、どうして解を治道とするのか」との問いに対して、「相統の中で惑を対治する力を得るのであり、解の時に生じるものではない」と答えた。相統については後

述するが、僧柔説は解（智慧）と惑（煩惱）が心に同時に存在することを認めるといつてよい。

一方、②北地のP二九〇八は有惑金剛と無惑金剛の二説を論じている。

有惑金剛家、即体照理辺、名之為解、朴境不違、即体是惑。是故一念金剛、体亦解亦惑。是故此即体之惑、敵対相当、正障金剛。遠而言之、亦障種智。是以用金剛為無礙道、種智為解脫道。無礙解脫、相続不断、共除金剛心中同体惑。是以經云、双道滅結、大仙之所説。（『藏外地論宗文献集成』・一七五頁）

傍線部は、一念の金剛には解もあり惑もあるといい、即体の惑（無明住地、心と結合する煩惱^②）は金剛を妨げて、一切種智の生起さえも妨げていると示している。特に注目すべきは二重傍線部である。そこでは金剛心を無礙道とし、一切種智を解脫道とみなしている。

無礙道と解脫道は相続して断つことがなく、共に金剛心の中の同体惑（即心の惑）を除去する。だから『經』に「双道は結を滅する」というは大仙の説く所なり」という。

実は①南地の『義記』にも同じ見解が説かれる。それは治城寺智秀と僧柔との問答である。

又問、若実法之中不并有能断之功、就仮名相続説有功者、無関^③

解脫、亦就相続仮名説為無関、為解脫也。答曰、如是。

又問、若無関解脫、亦就相続説者、何故名金剛為無関、種智為解脫也。答曰、此就無関因縁中説名無関、解脫因縁中説為〔解〕^④脱也。

又問、無関道力、解脫道力、其功各異不。答曰、亦得言異。

（羽二七一・一二二）

二重傍線部は、無礙道と解脫道を相続するというのは、どうして金剛を無礙道とし、一切種智を解脫道とするのかと問うている。②北地のP二九〇八の有惑金剛との一致性が窺えよう。

そもそも、南地では僧伽跋摩訳『雜阿毘曇心論』（四三四年訳）があつたので、僧柔たちはアビダルマ教理學書に接することも可能であつただろう。なお『雜阿毘曇心論』「賢聖品」には、双道滅について述べられている。

謂彼双道滅、世尊之所説者。此三界煩惱当知無礙解脫道滅。無礙道能断煩惱。得解脫道得解脫証。無礙道断煩惱、解脫道不失所作、故説双道滅。（大正二八・九一三中）

傍線部の示したように、無礙道は煩惱を断じ、解脫道はその所作を失わないので双道滅という^⑤。

さらに、『雜阿毘曇心論』には金剛と最後の学心も説かれている。

金剛喩四禪は名為漏尽者。金剛喩定名最後學心相應。

(大正二八・九三七中)

傍線部は金剛喩定(金剛三昧)が最後の學心に相應すると説いている。このことから①南地の『義記』と②北地のP二九〇八の金剛心義は、アビダルマ教理學に基づいているといえよう。さらにいえば、六世紀の半ば頃までは、アビダルマ論書と『成実論』は小乗の論書であるとされていなかったのである。後述の『大乘義章』には、成実説、毘曇説及び大乘説を取り上げて、大小乗の金剛心を區別するようになる。

金剛心が有惑か無惑かについては、①南地の『義記』の僧鍾・僧柔の二師は有惑説に偏るといつてよい。けれども、②北地のP二九〇八は無惑と有惑の二説を並べて論じている。さらに、①南地の『義記』より發展した見解は、②北地のP二九〇八に説く初發心住の金剛心である。その内容は以下のようである。

又復一解、未免生故、劣於種智。以此義推、障金剛之惑、用金剛前心除、乃至障初住之惑、用前解行終心伏断。若爾者、金剛心中、竟無闇可断。

又解、体雖無闇。本凡夫時、曾有障種智之惑、是故金剛心乃断。乃至初住解空之心、尚無惑可断。所以然、欲明解中無惑、解惑不並。而所以言空心断結者、此乃断凡夫時所起異心之惑。初住

中国南北朝期における金剛心義の展開

空心、尚無其惑。況復二住以上、乃至金剛、空解而有惑也。

(『藏外地論宗文献集成』・一七五頁)

要約すれば二つの解釈がある。一つは、金剛がまだ受生(輪廻)から脱していないので一切種智より劣るということを前提として、金剛を妨げる惑を金剛の前心で除去し、初住を妨げる惑を解行の終心で断ち切るとするならば、第十地の金剛心に断じる闇がないという。もう一つは、金剛心の体に闇がないというものの、元々凡夫の時、曾て過去に一切種智を妨げる惑があった、今の金剛心はそれを断ち切る。それに初住の空を知見する心となり、なおさら断すべき惑がない。空を知見する心で断結するというのは、凡夫の時に生じた異心の惑(四住地惑)^②を断ち切っているからである。初住において空を知見する心には惑もないので、十住の第二住から(十行・十廻向・十地を経て)金剛心に惑があるはずはないであろうと述べている。

ここでは、初住で空を知見することと、金剛心で断ち切る惑が過去の凡夫の時に有したものであることという点に、六十卷『華嚴經』(仏駄跋陀羅訳)に説く「初發心時、便成正覺」という理解が秘められている。金剛心義には明示されていないが、P二九〇八の相續義(二)には、「菩薩爾時入金剛三昧、此食消已、即見仏性、成無上道」と述べる。この文は金剛三昧(金剛心)と、仏性を見ることと、無上道を成就すること(＝成仏)を論じている。つまり、金

剛心と成仏とを結び付けている。このように、無惑の金剛となる初発心住は既に仏であると想定できよう。

金剛心の行位には、十地の最後の学心、初発心住、仏位の三説がある。では最後の学心の行位は何か。同文献の四依義では無垢地が次のように論じられている。

a 所以名無垢地、若作無惑解、断五住地惑、追年都尽、亦就所除制名、名無垢地。若作有惑解、所以名b無垢地、雖復有惑、此将尽、断之不難、故名無垢地。c 此無垢地、正分十地終心、以為無垢。入地、住地、制此二心、以為法雲。離則為二地、合則為一地。c 此之二地是学地心、猶有生滅紛動。但紛動将尽、与寂滅境相隣、与作勝名、故名寂滅忍。

〔藏外地論宗文献集成・一六二頁〕

これは華嚴十地と五忍との解説における、寂滅忍と無垢地の説明である。⑤。要点は次の三つである。a、あらゆる煩惱すなわち五住地惑を断ち切るので無惑である。b、有惑であつてもこの惑を断ち切るのは難しくない。c、無垢地は十地の終心であり、第十地の法雲地と共にまだ学地であり、寂滅の境地（仏果）に隣接している。つまり、金剛としての最終の学心は第十地の法雲地より高い段階の無垢地であることが知られる。これは南地教学より発展した見解であると指摘できる。

以上、①南地の『義記』と北地のP二九〇八の金剛心義とを比較検討した。その結果、両者の共通点は以下のようにまとめられる。

- i、金剛の比喩を用いて、金剛心の煩惱を除去するはたらしきになぞらえた。
- ii、金剛心にまだ除去されていない惑があると認めた。だからこそ金剛心は学地における最後の学心として、因地修行の最終の段階とみなされ、円満な仏果より劣る位置付けがなされた。
- iii、南北両地の金剛心義は、無礙道と解脱道の双道滅というアビダルマ教理学に基づいている。

一方では、①南地の『義記』より五十年程を経て、より発展した②北地のP二九〇八の金剛心義に関する見解は、以下の通りである。

- iv、頓悟による無惑金剛と漸悟による有惑金剛という二説が立てられた。

v、P二九〇八の金剛心位は十地の最後の学心以外、新たに仏果（如来）と初発心住と無垢地の三説を加えた。特に初発心住説は「初発心時便成正覺」の理論を裏付ける。

vi、①南地の『義記』は闇・惑・累などの煩惱の同義語を用いて、金剛心において断じる煩惱（闇）と金剛心以前で断じる煩惱（累）の区別を付けようとする意図が窺えるが、これは非常

に曖昧な表現であった。法安の「十地義」を参考にして、闇が無明住地惑であり、累が四住地惑であると考えられる。

一方、②北地のP二九〇八は即心の惑と異体の惑を用いて、それぞれ無明住地惑と四住地惑に相当し、金剛心において断ち切る煩悩をさらに細分化して明瞭にした。

以上のように南北両地を繋ぐ金剛心義を確認した。それでは、節を改めて③慧遠撰『大乘義章』の金剛心義を見てみよう。

三、『大乘義章』の金剛心義

『大乘義章』は、慧遠がそれ以前の仏教教理及び自説を整理し体系化した書物であり、仏教綱要書として知られている。^③『大乘義章』には、金剛三昧義（大正四四・六三七下―六四一上）という項目が立てられ、釈名・体性・開合弁相・就位分別・有惑無惑の五つの門（類）から金剛心義を論じている。中でも毘曇説・成実説・大乘説を並べて、それぞれの項目ごとに種々の解説を示している。言うまでもなく、まだ体系化されていない①南地の『義記』と②北地のP二九〇八（北魏洛陽期）の金剛心義とを比較すると、③『大乘義章』の金剛心義はより完備されている。そこで、本節は上掲した①②の金剛心義にも関連する部分を抽出し検討を加えておきたい。まず、第五門の金剛の有惑と無惑について、引用された成実説を検討する。

成実法中、亦有亦無。彼宗金剛、必在相統。実一念中無断結故、於彼統中始起之時、見理未明、細闇猶在、得言有惑。終成之時、見理分明、取執皆尽、得言無惑。又復不同毘曇法中所断惑得与治同处。故言無惑。
（大正四四・六四〇上）

冒頭の「成実法」と「彼宗」は成実論師説と理解してもよい。要するに、慧遠の伝えた成実論師説は金剛心有惑・無惑であるという二説を主張していたことがわかる。また、断惑証理の修道論において、修行の始まりと終わりの区別を用いて、それぞれ有惑説と無惑説を論じる根拠とする。つまり、修行の始めには觀察する真理はつきりと見極めていないので有惑ともいい、修行の終わりには觀察する真理はつきりと見極めているので無惑というと述べている。傍線部は、成実の教えでは金剛心に必ず相統があり、実の一念の中に断結はないと述べている。一念と相統とを対比させる用語は、既に①南地の『義記』にも確認できるが、相統義の説明がなかったもので、ここでは②北地のP二九〇八の相統義を参考にする。P二九〇八においては、三章にわたり相統義が論じられている。相統義（一）は次のように述べられている。

始從初地、終至法雲、修十地無漏、明解滿足。金剛心逝、種智統起現前、又不絶前、故名相統。

（『藏外地論宗文献集成』・一三四頁）

これは初地から第十地の法雲地までの十段階において、無漏智を修得し、金剛心が消滅（逝）すると、一切種智が続けて生起し現れるので、金剛心以前の無漏智と断絶しないから相続と名付けられるという。加えて、相続義（三）にも類似の見解が述べられている。

然実法運遷、無得無証。因円果就、必契相続。是以合抱之樹起於豪端。莫不始小終大、初浅後深。衆生修行、其致亦爾。要須久積妙因、十地行滿、金剛心謝、畢常顯現。爾乃変惑成智、轉識為解。是以『經』言、衆生作仏、仏続衆生。

（『藏外地論宗文獻集成』・一六九頁）

これは、断惑証理の十地修行（因）と仏智（果）との因果關係に基づいて、相続の義を論じている。すなわち、「実法が運遷し、無得にして無証である。因が円満にして果を成就するのは必ず相続によるのである。両手でかかえるほど大きな木も、はじめは毛の先ほどの小さい芽生えから大きくなったのであり、「枝葉は」始めは小さくても終りには必ず大きくなり、「根も」最初は浅くても後には必ず深くなる。衆生の修行もまったく同じである。必ず久しく妙因を積み重ねるべきであり、十地の修行が円満であり、金剛の心（のはたらき）をとどめて畢わり「常」を顕現する。その時すなわち惑を變じて智となり、識を轉じて解とする。こういうわけで『經』に『衆生は仏となり、仏は衆生をひき繼ぐ』と説いている」となろう。

注目すべきは、「久積妙因」と「変惑成智、轉識為解」という見解である。これは、十地における無漏智を積み重ねて、金剛心の時点で惑から智へ、無常から常へ転換するということで、成仏することの意味している。但し、P二九〇八は地論文献といつても、唯識の記述は見出されないため、轉識という語は後の唯識学派における轉識得智とは異なる内容であろう。この点は留意しなければならぬ。

以上のように、断惑証理の修道論における相続義は、①南地の成実涅槃學『義記』の研鑽から始まり、②北魏洛陽期のP二九〇八の展開を経て、③慧遠の『大乘義章』にまで継承されていたことは明らかである。

ところが、慧遠は成実説（毘曇説も含め）を大乘説と明確に区別しながら、従来の無惑説と有惑説を批判している。

大乘法中人説不同。先序異説、次弁其非、後顯正義。言異説者、昔來相伝常有二論。一説定有。此云何知金剛心者、是其學収。若全無惑、応名無學。又『經』中説無明住地仏菩提斷。若金剛中全無惑者、仏何所斷。又有人宣説、一向無惑、此云何知金剛心者、治惑明解、解惑不並、云何有惑。又若有惑、此惑須斷、応金剛後更立金剛、更不立故、明知無惑。異説如此。

（大正四四・六四〇上）

冒頭では、まず異説を述べ、次に其の非を弁じ、そして正義を顯すことによって、大乘説の不同を論じている。囲み文字で示したように、従来の異説としては、有惑説と無惑説が挙げられている。

有惑説は、金剛心を学に収めるので、もし惑がなければ無学となつてしまふ、さらに『勝鬘經』に無明住地惑を仏智で断ち切ると説かれる内容^④という。この傍線部の内容より、金剛心に残される惑は仏智で断ち切る無明住地惑であると明らかとなる。

無惑説は、もし金剛心に惑が残されば、これを断ち切る金剛心智が必要となるのに、金剛心の後に金剛心智は立てられないので無惑という内容である。

次に、異説を論破しその非を弁ずる箇所を確認しておきたい。

次弁其非。先破定有。若定有惑、是金剛心則不能断。若不能断、不名金剛、不名無礙。得名金剛、得名無礙、定知能断。以能断故不得言有。若言能断、復言有者、灯能破闇。是灯之中、应当有所破之闇。彼不得有、此亦応然。又復若言金剛心中、有無明住地、令仏断者、応名仏智以為金剛。応名仏為無礙道。而彼仏智不名金剛、非無礙故。不应説言金剛心中留殘無明令仏正断。又若仏智無礙正断便与経違。如『大品』説、無礙道中為名菩薩、解脱道中名為仏。云何言仏為無礙断。又若仏智作無礙道正断無明。小乘法中応用尽智為無礙道断非想惑。彼既不然、此亦不爾。

(大正四四・六四〇上)

ここでは、従来の有惑説を論破する理由が三つ挙げられている。一点目は、既に金剛を無礙と名付けるので、灯が闇を破るように煩惱を滅する金剛に惑はないのである。二点目は、『大品般若經』において無礙道を菩薩、解脱道を仏と名付けると説くので、解脱道の仏智は無礙道の中に金剛心の惑を除去することがないのである。三点目は、もし仏智が無礙道において無明を断ち切るならば、小乘法の中においても尽智を用いて無礙道として非想惑を断ち切ることになる。そうではないので、仏智が無礙道の無明を断ち切るのではないと述べている。

従来の有惑説を論破する根拠は、金剛であらゆる煩惱を断ち切るはたらきがあるという点にあると思われる。この二点目と三点目は注目に値する見解であろう。無礙道と解脱道については、慧遠は意図的にアピダルマ論書を避けて、敢て大乘經典の『大品般若經』を引用したことが推測されよう。なぜなら、『大乘義章』には「小乘法中、宣説如来有善無記無不善業、如『雜心』説、又如『成実』」(大正四四・六〇〇上)と明示するからである。

それでは、従来の無惑説をいかに論破するのかについて確認する。

次破定無。若定無惑、応名無学。非無学故、不应全無。又若金剛一向無惑、所見之理応与仏齊、所成之智応与仏等。如『地經』説、十地菩薩遍滿一切界如稻麻葦、比如来智百千万倍乃至算数畢竟不及。定知金剛惑障未尽。又復諸仏所以為常、由惑尽

故、証理窮故。若金剛心一向無惑、見理応窮。尽惑理窮、何不為常。弁非如是。

(大正四四・六四〇中)

無惑を論破する根拠としては、「金剛は無学ではないので、全く惑がないのでもない。なぜなら、金剛に全く惑がなければ、知見する理は仏と同じであり、成就する智も仏と同じだからである。しかし『十地經』に説かれるように、十地菩薩は百万倍はおろか数得られないほどの差で仏智に遠く及ばない」という。したがって惑を滅尽し、理を見極める常住なる仏と比べて、金剛心菩薩はまだ完全に惑を断ち切れず、理も見極めるのではないことが明らかとなる。

以上、慧遠は従来の有惑と無惑の二説を論破している。しかし、異説と論破の根拠をよく吟味すれば、慧遠は有惑説を用いて無惑説を否定し、無惑説を用いて有惑説を否定していることがわかる。すなわち、金剛は無学ではないという有惑説を用いて、無惑を否定している。同時に、金剛心の惑を対治するはたらきがある無惑説を立て、金剛心に惑が残されるという有惑も成り立たないと論じているのである。

それでは、慧遠はどのような見解を正義とするのであろうか。

次頭正義。金剛心中亦得有惑、亦得無惑。是義云何。無明有二。

一、異相無明、於諸法中緣而不了、相返明解、故曰異相。二、自性無明、即彼緣照对治金剛、相雖明照、性無明是闇惑、名性

無明。是二難分、宜以喩頭。異相無明、所緣不了、如闇中視。自性無明、如夢中見、雖有所了、性是昏闇、惑相如是。金剛心中、異相無明、一切尽故、得言無惑。自性無明、猶未尽故、得言有惑。以無惑故、於仏境界照見、悉知与仏無別。是故『經』中説為等覺。

(大正四四・六四〇中)

冒頭では、正義としては金剛心における有惑と無惑の二説を主張していることが明らかである。なお、この二説は異相無明と自性無明の二種の無明に基づいて論じられている。異相無明とは、諸法を迷いのままに知しないことが、相としての明である知解に反している。それは暗い中で物を見るようである。自性無明とは、彼の諸法を所縁として観照することについて明(対治の金剛)であるにしても、本性としての無明は闇惑であることをいう。そして、自性無明は、人が夢の中において、たとえ了知する部分があるにせよ、本性として昏闇していることをいう。ここでは、無惑説は金剛心に異相無明がないといい、有惑説は金剛心に自性無明が残っているという。

二種の無明に関しては、『大乘義章』巻五の二障義(大正四四・五六一—五六四中)と断結義(大正四四・六四一—六四五上)でも論じられている。④⑤ そこでは、異相無明が粗大なものであり、自性無明が微細なものであるといわれる。換言すれば、無惑とは金剛心に粗大な惑(異相無明)がないといい、有惑とは金剛心に微細な惑(自性無明)がまだあることをいう。だから、粗大な惑がない金剛

心は、仏の境地を知見することができ、仏と等しい等覺と称されている。『經』の中に説いて等覺となす』という『經』については、完全に一致する經文を見出すことはできないが、恐らく『菩薩瓔珞本業經』（偽經、大正二四卷に所収、一四八五番）からの取意であろう。^⑤

確かに、成実説にせよ、大乘説にせよ、金剛心の有惑と無惑という二説が立てられる。その根本的な相違は、大乘説としての煩惱の概念と分類の細分化にあると考えられる。異相無明と自性無明の展開はその実例となる。

さらには、③の『大乘義章』の金剛心義は心識説を取り入れたことによって、①南地の『義記』と②北地のP二九〇八より格段に進展している。なぜなら、慧遠は唯識を用いて金剛心を解釈しているからである。これは以下の第二門の弁体性、特に心体に基づく体性の解説から明らかとなるだろう。

次就心体、言其体性。心別有三。一者事識、所謂六識緣事之心。二者妄識、亦名業識、亦名現識、所謂第七虚妄之心。三者真識、所謂第八如来藏心。小乘金剛用彼分別事識為体。於事識中第六意識、分別觀解能断四住、不為四住煩惱所壞、故曰金剛。大乘法中金剛有二。一緣治金剛。二者真証。緣治金剛、妄識為体。於妄識中觀空之解、能除闇障、不為闇惑之所破壞、故曰金剛。真識金剛、真識為体。真識之心本性清淨、空義隱覆、遂成垢染、

息除妄染。心淨照明、照明淨慧、証法本如、不見一法可起妄想。不起妄故、能除闇惑、不為惑障之所破壞、故名金剛。

（大正四四・六三八中）

慧遠は八識に基づいて心を三つに分けて分析している。前六識の事識は緣事の心であり、第七識の妄識は虚妄の心であり、第八識の真識は如来藏心であるという。小乘法では、第六の意識において、四住地惑を断ち切るので小乗の金剛という。大乘法では、第七識の緣治金剛と第八識の真証金剛があることが確認できる。

他方、①南地の『義記』と②北地のP二九〇八の金剛心義は一切種智のみを用いている。それに対して、慧遠は大小金剛の相違に伴い、修得の智慧もより緻密に分類している。これは心法によって金剛心の体性を論じる箇所である。

今此三昧諸心法中、用慧為体。觀理断結、唯慧能故。是何等慧。小乘法中、四諦之慧。緣覺法中、十二緣慧。大乘法中、了達法界、如實慧也。

（大正四四・六三八中）

要するに、理を觀察し煩惱を断ち切る智慧は三つであるという。すなわち、小乗（声聞）の四諦を觀察する智慧と、緣覺の十二支緣起を觀察する智慧と、大乘の如実に法界を了知する智慧とである。しかも『大乘義章』による金剛心義の組織化に付随しながら、金

剛心位も整理されている。次の「就位論金剛之義」には、小乗法の「通別有五…中略…如『雜心』説」の五説と、大乘の五説が述べられている。注目すべきは、大乘法の金剛心位には先行した①南地の『義記』の金剛心位説が見られる点である。その内容を確認しておきたい。

大乘法中、通別有五。一、簡信異謗。十信已上、信心成就、永離謗法、同曰金剛。二、簡住異退。習種已上、解行成就、堅固難壞、齊名金剛。三、簡出世、異於世間。初地已上、証真無漏、能破惑妄、不可破壞、悉名金剛。四、簡上異下。第十地中、一切智能、皆名金剛。故『地經』中、十地菩薩、初入地時、得離垢三昧、離垢三昧、猶是金剛破障之義。五、簡終異始。其唯最後窮終一念、以為金剛。故『地持』云、「於最後身、菩提樹下、得衆相離垢障三昧、名金剛三昧所攝」^⑤。以斯准驗、局在窮終、位分如是。
(大正四四・六三九下)

これによれば、大乗法の金剛心位は以下の五つとしてまとめることができる。

- (1) 十信已上。信と謗を区別し、謗法を離れて信心を成就する。
- (2) 習種性已上（＝十住位）。住と退を区別し、解行を成就する。
- (3) 初地已上。世間と出世間を区別し、真の無漏を証得する。

- (4) 第十地。十地菩薩は離垢三昧を得る。
- (5) 最後窮終の一念。修行の終と始を区別し、修行の終りに理をきわめる。

(5)の最後の窮終の一念という金剛説は、上掲した①南地の『義記』と②北地のP二九〇八の見解と同一視しても差し支えないであろう。慧遠は成実説を異説（小乗説）として否定しながら、正義としての大乘説に先行した成実涅槃学の要素も吸収したといえよう。注意すべきは十信位と習種性（種性地）の二位である。十信位に関しては、『大乘義章』の八倒義（大正四四・五七六上―五八〇上）に、次のような説明が示されている。

十信位中、於大菩提真信成就、正能伏除。種性已上、随分永断。初地窮尽。
(大正四四・五八〇上)

すなわち、十信位においては、大菩提の真信を成就して凡夫や小乗の誤った見を伏除し、種性已上で分に煩惱を断じ、初地で滅尽するという。ここでは、大乘菩薩道の優位性を強調していることが読み取れる。

また、種性地に関しては、二種種性義に次のように述べている。
言種性者亦名十住。若言十住当分為名。解觀成就、不退名住。

種性は十住であることがわかる。また、不退を住と名付けるといふ一文は、住と退を区別する(2)の種性の金剛位に該当する。十住と金剛心位との結び付け方は、上掲した②P二九〇八の初発心住説が先行するのである。

このように、『大乘義章』では、金剛心位は初発心住より、さらに低い階位の十信まで引き下げ、第十地より初地にまで引き上げることが明らかとなった。また、第十地の金剛心位は、第十地の最後の一念とする金剛心位とも区別されるようになった。

以上、金剛心の有惑・無惑及び金剛心位をめぐって、従来の成実涅槃学に繋がる部分を概観した。①南地の『義記』、②北地のP二九〇八、③『大乘義章』の三者における金剛心義の展開を見ると、以下のようなことが指摘できる。

i、金剛心の行位説は、十地の最後の学心から、仏果・無垢地・初発心住の三説、さらに『大乘義章』の十信・初発心住・初地・第十地・第十地の最後の一念という五説までの展開が明らかになった。

ii、三者は共に金剛心における有惑と無惑の二説を主張しているが、③『大乘義章』は煩悩の細分化によって、異相無明と自性無明を用いて、有惑と無惑の大乘説を立てている。

iii、心識説を取り入れた『大乘義章』の金剛心義は、先行する地論文獻P二九〇八より格段に進展しているといつてよい。

iv、①南地の『義記』にせよ、②北地のP二九〇八にせよ、成実と大乘の区別が付けられてこなかった。一方、『大乘義章』では成実説と大乘説とを区別しながら、『成実論』『雜阿毘曇心論』を小乗論書としての位置付けていることが明らかになった。但し、旧有の成実涅槃学の最後の一念とする金剛説が『大乘義章』の大乘説に取り入れられたことは無視することができない。

四、まとめ

以上、①南地の成実涅槃学の羽二七一『義記』、慧遠に先行した②北地の地論文獻P二九〇八、③慧遠の『大乘義章』に論じられる金剛心義の側面を考察してきた。従来、考察されてこなかった金剛心義の展開については、以下のようにまとめることができる。

ア、①南地の『義記』と②北地のP二九〇八は、アビダルマ教理に繋がる金剛心が十地の最後の学心と見なされる。これは漸悟による断惑証理の修道論において、有惑の金剛が因地であることを意味するものである。

イ、②P二九〇八では金剛心位も第十地の最後の学心のみから、仏果(如来)、無垢地(法雲地より高い段階)、初発心住の三説が立て

られる。また、「初発心住便成正覺」の理論展開の素地はP二九〇八にあることが明らかになった。

ウ、③『大乘義章』の金剛心義は、従来の成実説を批判的に引用している。さらに、慧遠は心識説を用いて金剛心義を論じたと同時に、大乘と小乗の金剛心義も立てている。これは①南地の『義記』と②P二九〇八より格段に進展しているといえよう。

エ、金剛心位は、まず①南地の『義記』の第十地の最後の学心という一説から、次に②北地のP二九〇八の仏果・無垢地・初発心住の三説へ、さらに③『大乘義章』の十信・初発心住・初地・第十地・第十地の最後の一念という五説までの変遷が明らかになった。

このように成実涅槃学から地論学の研鑽へ、金剛心義の展開の流れが把握できよう。なお、淨影寺慧遠以後、三論学派の吉藏撰『金剛般若経義疏』にも「今喻智慧名金剛也」（大正三三・八九下）と述べられている。同じく三論学派の慧均（百濟出身か）撰『大乘四論玄義記』巻二にも「金剛心義」が論じられる。^⑤さらに、天台智顗の『四教義』にも、金剛心位は等覚か法雲地かという問題に関して「南北法師抑諍此義」と述べられている。^⑥すなわち、金剛心義はより活発に議論されていることが知られ、これらについての考察は今後の課題とする。

キーワード 金剛心 断惑 成実涅槃 地論 慧遠

註

① 成実涅槃学は、また涅槃成実学ともいい、南朝の宋・齊・梁の時代、主に『大般涅槃経』と『成実論』の研鑽によって、両者を融合させる形で発達した教理学体系であつたと指摘されている。船山徹「地論宗と南朝教学」、荒牧典俊編『北朝隋唐中国仏教思想史』所収、法蔵館、二〇〇〇年、一三三―一五三頁。船山徹「梁の開善寺智蔵『成実論大義記』と南朝教理学」、麥谷邦夫編『江南道教の研究』所収、二〇〇七年、一一―一三五頁。従来では、成実学派と涅槃学派についてそれぞれ研究成果がある。福原亮蔵『成実論の研究』、永田文昌堂、一九六九年。布施浩岳『涅槃宗の研究』（前篇・後篇）、国書刊行会、一九七三年（初版一九四二年）。しかし、成実学派と涅槃学派の多くの学僧は、『涅槃経』と『成実論』、もちろん『法華経』や『勝鬘経』などのほかの経論も兼ねて研鑽している。また、布施「一九七三」前掲書（後篇）（四頁）は、「況して劉宋已後の涅槃学者が概て後に述ぶる如く成実の学に通じ且つ法華経を讃仰せる事実に徴する時、羅什思想の隠然たる流れを認めねばならないが…後略」と述べている。例えば、梁の三大法師である開善寺智蔵・莊嚴寺僧旻・光宅寺法雲、及び本稿で扱う僧鍾・僧柔は成実論師でありながら涅槃学派の代表者とも認められる。以上を参考にして、本稿は成実涅槃学を用いる。

② 金剛三昧…①金剛が一切に無礙なように、あらゆる事がらに通達する三昧という。②三乗の修行者が最後の一切の煩惱を断じて、それぞれ究竟の果を得る三昧をいう。金剛喻定・金剛定ともいう。中村元編『広説仏教語大辞典』（縮刷版）二〇一〇年、五一七頁。室寺義仁氏は「金剛喻定について」（『高野山大学密教文化研究所紀要』別冊二、二〇〇〇年）において、金剛喻定によって一切の煩惱を断ち尽くして初めて「尽智」が同時瞬間的に生じ、次の瞬間には最後の「解脱道」へ入ると説明している。ほかの先行研究、渡辺章悟「最終解脱へ向かう三昧―『大般若波羅蜜多経』における金剛喻

定―、『印度哲学仏教学』二〇、二〇〇五年(一)、三八―五七頁。

- ③ 南北朝から隋唐にかけて、成実涅槃・地論・天台・三論・華嚴・唯識などの諸学派に金剛心位の議論がなされている。本稿で触れた南地の羽二七一「義記」、慧遠撰『大乘義章』以外、智顗説『妙法蓮華經玄義』に「十地即是聖種性。此皆入別教四果聖位。悉断無明別見思惑。等覺位即是等覺性。若望菩薩名等覺位。若望仏地名金剛心菩薩。亦名無垢地菩薩也。妙覺地即是妙覺性。即是究竟仏菩提果。大涅槃之果果也」(大正三三・七三二上)とある。吉蔵撰『法華玄論』に「問。信解品明三身者。寿命品論何等仏耶。答。有人言是金剛心耳。猶未成仏但任持三昧故延之使長。為广度物也」(大正三四・四三七上)とある。智儼『華嚴經内章門等雜孔目章』に「八約行。金剛心後、得一切智智即是仏」(大正四五・五六一上)とある。基撰『大乘法苑義林章』に「金剛心位猶有有漏・劣無漏身。解脫道生有漏都尽、劣無漏滅。故經説捨捨無常色等。四智円成功徳具足」(大正四五・三六四下)とある。新羅華嚴の元曉『起信論疏』に「金剛喻定、根本心尽者、猶此中説遠離微細念。是謂生相盡也。上來別明始覺差別」(大正四四・二二〇下)とある。

- ④ 經論の金剛喻定(金剛心)について以下の論考がある。室寺義仁「二〇〇」前掲書は、アビダルマ教理学における金剛喻定の相違を考察した。渡辺章悟「二〇〇五年(一)」前掲書、同「Vajropamasādhīの考察」、『印度学仏教学研究』五四(一)、二〇〇五年(一)、三五七―三四九頁。渡辺章悟氏は、『大小品般若經』における金剛喻定という語義解釈の詳細を考察した。関悠倫「『釈摩訶衍論』における金剛喻定について」、『智山学報』六六、二〇一七年、一〇九―一二八頁。関悠倫氏は、『釈摩訶衍論』における方便と正体の二種金剛喻定説を考察した。

- ⑤ 南北朝の仏教学展開の流れとしては、『涅槃經』『勝鬘經』『成実論』などの研鑽から、『涅槃經』『十地經論』などの研鑽へ、次いで『涅槃經』『撰大乘論』などの研鑽への大雑把に捉えられる。い

わゆる成実涅槃学から、地論学、撰論学への展開という。南地の成実涅槃学と非慧遠系統の地論学との関連が指摘されている。青木隆「天台行位説の形成に関する考察―地論宗説と比較して」、三崎良周編『日本中国仏教思想とその展開』、山喜房仏書林、一九九二年、三七―五四頁。船山徹「二〇〇〇」前掲書。また、藤井教公氏は慧遠を代表する地論南道派は、『涅槃經』(北本四〇卷)『華嚴經』『勝鬘經』『十地經論』などを合わせて研究していたと指摘している。藤井教公「北朝における涅槃研究―慧遠の『涅槃經』理解の特徴―」(『印度学仏教学研究』二九(二)、一九八一年。なお、南地の成実涅槃学派は『涅槃經』(南本三六卷)『勝鬘經』『十住經』『成実論』などを兼学している。南北両本『涅槃經』の相違があったにもかかわらず、金剛心義・仏性義・十地断伏義などの共通的研究課題については、教学上の同異を比較することが可能であろう。

- ⑥ 青木隆・石井公成等編『藏外地論宗文献集成』、金剛大学校仏教文化研究所、二〇一二年。同『藏外地論宗文献集成 続集』、金剛大学校仏教文化研究所、二〇一三年。

- ⑦ 『藏外地論宗文献集成』、二二六―二七頁、金天鶴氏の序文を参照。
- ⑧ 羽二七一「義記」については、以下の論考がある。西域文化研究会編(白田淳三・三谷真澄)『擬南齊竟陵文宣王所持「雜義記」の残簡―「敦煌秘笈」羽二七一録文研究』、『仏教文化研究所紀要』五二、二〇一四年。池田将則「杏雨書屋所藏敦煌文献「義記」(羽二七一)の基礎研究」、『동아시아 불교 문화』16、二〇一三年。白田氏と池田氏は共に、当該文献は南朝齊竟陵王蕭子良(四六〇―四九四)永明年間(四八三―四九三)の『雜義記』であろうと推測している。
- 張凱「中国南朝の法身思想に関する一考察―特に「敦煌秘笈」羽二七一「不知題仏教義記」をめぐる」、『武蔵野大学人間科学研究所年報』三、二〇一四年。張文良「南朝十地学の側面―法安の十地義解釈を中心とする―」、『印度学仏教学研究』六二(二)、二〇一四年。同「南朝成実宗における二諦説―杏雨書屋藏羽二七一「不知題仏

経義記』の「二諦義」を中心に―、『東アジア仏教学術論集』七、二〇一九年。

⑨ 池田将則氏は、煩惱の断・伏に関する「南方法師」の学説は、おそらくは『大般涅槃經集解』巻十五にみられる劉宋末から梁初にかけての南朝教理学における断惑説を踏まえているであろうと指摘している。（『藏外地論宗文献集成』・一一四―一一五頁）。

⑩ 十地断伏義を焦点にあてた『大般涅槃經集解』と羽二七一『義記』の「中寺法安法師解十地義」とP二九〇八の「四依義」との共通点については、拙稿「中国南朝仏教の行位解釈に関する一考察―成実涅槃師を中心に」（『龍谷大学仏教学研究室年報』二四、二〇二〇年、四一―七三頁）を参照されたい。

⑪ 中でも、『高僧伝』に僧鍾（大正五〇、三七五下）、僧柔（大正五〇、三七八下）、慧隆（大正五〇、三七九下）、智順（大正五〇、三八一上―中）、智秀（大正五〇、三八〇下―三八一上）が立伝されている。一方、慧隆、曇織、僧表、慧珍、光泰五師の伝記は不明である。

⑫ 吉川忠夫・船山徹訳『高僧伝』（三）、岩波書店、二〇一〇年、一七―一七九頁。

⑬ 吉川忠夫・船山徹「二〇一〇」前掲書、一三六頁注(1)を参照。

⑭ 『妙法蓮華經玄義』三者、定林柔次二師及道場観法師、明頓与不定同前。更判漸為五時教、即開善光宅所用也。四時不異前。更約無相之後、同帰之前、指『浄名』『思益』諸方等經、為褒貶抑揚教。（大正三三・八〇一中）。

⑮ 『出三藏記集』・『成実論』十六卷。…中略…齊永明七年十月。文宣王招集京師碩学・名僧五百余人。請定林僧柔法師謝寺慧次法師。於普弘寺法講。（大正五五・七八上）。

⑯ 『藏外地論宗文献集成』、一一四―一一九頁、P二九〇八の解題を参照。

⑰ 南本『大般涅槃經』「四依品」…何等為四。有人出世具煩惱性、是

名第一。須陀洹人斯陀含人、是名第二。阿那含人、是名第三。阿羅漢人、是名第四。是四種人出現於世、能多利益憐愍世間。…後略（大正二二・六三七上。北本「如来性品」、大正二二・三九六下）。南北朝期において、『涅槃經』の研究に伴い、『十住經』及び『十地經論』に説く十地、『華嚴經』に説く十住・十行・十廻向・十地、さらに偽經の『菩薩瓔珞本業經』に説く四十二位と『仁王般若波羅蜜經』に説く菩薩行の五忍（伏忍・信忍・順忍・無生忍・寂滅忍）なども行位論の構成要素となり、二乗の四果と菩薩の十地という大小乗の行位関係について論じられる。

⑱ 一例としては、相統義（二）「金剛前無明衆生、次第修行、不断不滅、終至金剛、變彼無明衆生、作大明智。大明種智、統無明衆生、始終是一、故名為統」が挙げられる。P二九〇八は、『藏外地論宗文献集成』の一三三―一三四頁、一五四―一五七頁、一六九―一七三頁という三つの章がある。

⑲ 『大般涅槃經』「如来性品」…復次善男子。譬如有人善知伏藏。即取利鏹斷地直下磐石沙磧直過無難。唯至金剛不能穿徹。夫金剛者所有刀斧不能沮壞。善男子。衆生仏性亦復如是。一切論者天魔波旬及諸人天所不能壞。（大正二二・四〇八下）。これは金剛を仏性に喩える内容である。

⑳ 下流については、失訳（鳩摩羅什の直後に訳した『薩婆多毘尼毘婆沙』に「仏欲令衆生知仏心者、乃至下流鈍根衆生、仏欲令見即得見之」（大正三三・五三四上）と説かれている。

㉑ 拙稿「成実涅槃学の断惑論―菩薩と二乗の行位の接点を中心として―」、岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』二一、二〇二一年、三七―五四頁。

㉒ 『義記』の基礎的情報に関しては、拙稿「二〇二〇」前掲書を参照されたい。

㉓ 過去・未来に関わる惑については、冶城寺光泰（問者）と僧柔（答者）との問答を参考になる。

答曰、凡無漏道心未免惑者、皆有一種累也。一者異体、二者同体。

又問、何者同体、何者異体。答曰、異体者、凡夫先曾起惑成就過去、雖障道心、使明不通了、是異体障。同体者、即此彼障道心、有所不了、即同体障。(羽二七一・二三三)

- ②④ P二九〇八「五住地惑義」…即心之惑、更無作意、仍守本名、故為無明住地。…中略…。異心煩惱、由開作意、…中略…、合為四住前能生後地、同類不移曰住。(『藏外地論宗文獻文獻集成』・一七八頁)。これを参照すれば、即心の惑が無明住地となり、異心の惑が四住地惑であると理解できる。五住地惑は、『勝鬘經』(大正二・二二〇上)の説く、見一処住地、欲愛住地、色愛住地、有愛住地を合せて四住地惑とし、無明住地を加えて五住地惑となる。池田将則「敦煌出土地論宗教理集成文獻スタイン六・一三V第二章「經弁五住地煩惱義」に見られるアビダルマ教理について」、金剛大学校仏教文化研究所編『地論宗の研究』所収、国書刊行会、二〇一七年、三三三―三五六頁。

- ②⑤ 写本では「無閼道」と「無碍道」との二種の書き方があり、使い分けの意図は不明である。内容は間違えなく、無碍道と解脱道の双道滅結の議論である。

- ②⑥ 写本では「解」が脱落したのではないかと思う。

- ②⑦ 東晋時代に訳出された『阿毘曇心論』(大正二八所収、一五五五〇番)と、南朝宋代(四二〇―四七九)僧伽跋摩訳の『雜阿毘曇心論』(四三四年訳、大正二八卷所収、一五五二番)と、北齊(五五〇―五七七)時代、那連提耶舍訳の『阿毘曇心論経』(大正二八卷所収、一五五一番)などが存している。北齊訳は羽二七一「義記」とP二九〇八の年代より遅くなる。

- ②⑧ 『雜阿毘曇心論』には無礙道解脱道は三界煩惱を滅尽すると説かれている。但し、南北朝の学僧らは大乘修道論を構築していく中、三界の内・外の惑を分けるようになった。詳細の検討は別稿に譲る。

- ②⑨ 現存する最古の經典目錄『出三藏記集』に、釈道安(三一四―三八五)「阿毘曇序」(大正五五・七二上―中)、廬山慧遠(三三四―四一六)「阿毘曇心序」(大正五五・七二中―下)、釈道標「舍利弗阿毘曇序」(大正五五・七〇下―七一上)などの序文がある。釈道安は「阿毘曇者、秦言大法也」と述べ、慧遠は「阿毘曇心者、三藏之要領、詠歌之微言。管統衆經領其宗会、故作者以心為名焉」と述べている。この時代では釈道安も廬山慧遠もアビダルマ文獻が大法であり、三藏(經・律・論)の要領としての学問とみなされる。淨影寺慧遠以前にはアビダルマ論書が小乗である記録が見られなかった。『大乘義章』は「小乗三者。四阿含等。是修多羅。五部戒律。是其毘尼。毘婆沙等。是阿毘曇。大乘三者。華嚴等經。是修多羅。清淨毘尼等。是其毘尼。大智論等。是阿毘曇」(大正四四・四六九中)と述べ、大小乗三藏を明確に区別している。但し、毘曇説と成実説を小乘法と見なされる創唱者は慧遠であるかどうかについて判明できない。慧遠の師の法上は『大乘義章』六巻を著した記述が『統高僧伝』(大正五〇・四八五下)に見られるが、法上の『大乘義章』が散逸している。また、慧遠と並びに隋の三大法師と称される智顗(五三八―五九七)と吉藏はアビダルマ論書を小乗(低下)視している。一方では、玄奘の師である道基(五七七―六三七)は『雜阿毘曇心論』を講義し、アビダルマ論書を包摂する大乘の立場となる。玄奘の『大乘阿毘達磨論集』などの翻訳は、小乗のアビダルマも「大乘」の包摂されるというインド瑜伽行派の大乘觀が反映されている所であると指摘されている。道基と玄奘の大乘觀については、吉村誠「中国唯識思想史研究―玄奘と唯識学派」(大藏出版、二〇一三年)、二二七―二五六頁を参照。要するに、中国仏教におけるアビダルマ論書の評価は大乘↓小乗(大小乗の相對、低下の小乗)↓大乘(小乗を包摂する)という変化が示唆されている。
- ③⑩ P二九〇八の「無惑金剛」…然此金剛最後の学心、非不照理周尽、但企求而知、未能同如種智、容預而知。(『藏外地論宗文獻集成』・

一七四頁)。要するに、無惑金剛も最後の学心とみなされている。

- ③① 金剛前心と金剛後心は対とする。金剛前心の詳細は不明であるが、宋代では竺道生の教学を継承した龍光寺沙門宝林の弟子、法宝は「著『金剛後心論』等」(大正五〇・三六七上)と述べられている。また『大般涅槃經集解』(南本『涅槃經』の註釈書)に金剛後心の用例がある。

僧亮曰。金剛後心、煩惱尽处、得涅槃也。

(大正三七・四三四上)

宝亮曰。…中略…金剛後心、称一切智。転因字果、名為果性也。

(大正三七・四四七下)

その後天台や三論文献が頻繁に用いる。智顗の『四教義』には「妙覺地者、金剛後心、朗然大覺。妙智窮源、無明習尽、名真解脫」(大正四六・七五九下)とある。吉藏の『金剛般若經義疏』には「若言仏身是常住法凝然在金剛後心、此亦易信」(大正三三・一〇五上)とある。

- ③② 「有惑金剛」には、六地終心以来、唯断異心之惑、七地以上乃至金剛、唯断即心之惑と述べている。同文献の「五住地惑義」は、即心之惑を無明住地とし、異心之惑を四住地惑と規制している。『藏外地論宗文献集成』、一七六—一七九頁を参照。

- ③③ 『華嚴經』の受容に伴い、十住・十行・十廻向・十地(四十の修行段階)に仏地を加えて四十一位とする行位説が立てられる。または、仏地の一地を無垢地と妙覺地の二つに分けた四十二位の行位説となる。そして、十住の前に十信を加えた五十一位または五十二位の行位説もある。

- ③④ P二九〇八の教迹義には漸教と頓教の二釈を述べ、『華嚴經』の七処八会・六忍十地は頓教法輪であると明記されている。(『藏外地論宗文献集成』、一四〇—一四八)。

- ③⑤ 五忍と十地の配当は、住前三十心を伏忍とし、初地から第三地までを信忍とし、第四地から第六地までを順忍とし、第七地から第九

地までを無生忍とし、第十地の法雲地・無垢地・妙覺地の三地を寂滅忍とする。P二九〇八の四依義(三)を参照。(『藏外地論宗文献集成』、一五七—一六八頁)。

- ③⑥ 岡本一平『大乘義章』の思想形式について、『印度学仏教学研究』五三(二)、二〇〇五年、六五六—六五九頁。

- ③⑦ 『大乘義章』では金剛心義という題目が使用されていないものの、最後には「金剛心義粗述如是」(大正四四・六四一上)という一文で締め括っている。したがって、金剛三昧義は金剛心義と同一視されてもよい。

- ③⑧ 『仁王般若波羅蜜經』(偽經)には「九十刹那為一念。一念中一刹那經九百生滅。乃至色一切法亦如是」(大正八・八二六上)と述べられている。吉藏撰『法華玄論』には「問、相續仮云何。答、有二釈。初云一念実法生而即滅。尚自不固何能運出。必須相續方有運義。如智断惑如明除闇。次釈云若解断惑必須兩念。排他為難故也。今善体能運一念有力。如一念智即能知境。一念善即能感樂不仮相續也」(大正三四・三九三中)とある。

- ③⑨ 冶城寺智順と僧柔との問答。

問曰、金剛体解力は一、無有二用。云何以解於惑、能転則有力、於障独無功。

答曰、金剛是一念、一念是実法、豈得有功於此惑也。俱以体能感種智、相續中有力耳。豈可一念之中、責之治惑之功也。

(羽二七一・一二二)

- ④① この引用文の前に「夫至寂之明、以惑心為本。大覺之照、以未識為基。是以大士樹德超代、方証常樂妙果、高明累劫、方契我淨之宗」とあった。つまり、至寂の明と大覺(仏)の照とをさとの境地になぞらえる。その逆に、惑なる心と未識(未だ真理を認識できない状態)とは迷いの凡夫を指すのである。

- ④② 実法運遷については、慧遠撰『大般涅槃義記』巻七に「言以性故生住異壞皆是常者隨事分齊各自守性恒有為常。念念滅故不說常者、

於法分齊運運遷滅故是無常。理実念念亦生住異。摠終說滅。是大涅槃能斷滅故名無常者治滅無常有漏法」(大正三七・七九〇中—下)とある。

④2 この譬喩は『老子』「合抱之木、生於毫末」からである。

④3 「衆生作仏、仏統衆生」の出典は未詳である。五〇四年北地で抄写された『法華經文外義』にも「又問、相統義云何」、「又問、衆生作仏、仏統衆生、涅槃是假以不」とある。(方広鎭編『藏外仏教文獻』第二輯、宗教文化出版社、一九九六年)、『法華經文外義』に関しては、菅野博史『法華經文外義』研究序説(『印度学仏教学研究』五五(一)、二〇〇六年)を参照されたい。

④4 P二九〇八には、「問意、若無明転、則變為明」、此為当就統中以弁變、為当指統以為變。答家解言、統中以弁變」と論じられている。その後北周時代(五五六—五八二)に成立したと考えられる地論文獻『融即相無相論』の「転無明以為明論第三」では煩惱即菩提が述べられている。前者は煩惱を断滅して無漏智を獲得するという漸悟の理論である。後者は煩惱を断滅するのではなく、そのまま転じて無漏智になるという頓悟の理論である。これらの詳細な検討は今後の課題とする。『融即相無相論』に関しては、青木隆「敦煌出土地論宗文獻『融即相無相論』について—資料の紹介と翻刻—」(『東洋の思想と宗教』二〇、二〇〇三年、一一—一二〇頁)に詳しい。

④5 唯識が説く「有漏の八識を転じて無漏の四智を得る」という転識得智説は、無著(三九五—四七〇頃)の創唱した説といわれる。安慧(五一〇—五七〇)・護法(五三〇—五六二)の時代には、前五識を転依して成所作智、第六意識を転依して妙觀察智、第七末那識(染汚意)を転依して平等性智、第八阿頼耶識を転依して大円鏡智となるという説が確立した。但し、インド、中国及び日本の唯識諸家の見解は相違があるとも指摘されている。先行研究には次の論考がある。長谷川岳史「転識得智に関する唯識諸家の見解—インド・中国篇—」、『龍谷大学仏教学研究室年報』七、一九九四年、二二—

三七頁。同「転識得智に関する異説」『印度学仏教学研究』四三(二)、一九九五年、七四六—七四八頁。同「転識得智に関する唯識諸家の見解—日本篇—」、『龍谷大学仏教学研究室年報』(八)、一九九五年、二八—四一頁。同「転識得智の異説に関する慧沼の見解」、『印度学仏教学研究』四三(二)、五七五—五七七頁。

④6 『勝鬘經』世尊、如是無明住地力、於有愛數四住地、無明住地其力最大。…中略…阿羅漢、辟支仏智所不能断。唯如来菩提智之所能断。如是世尊、無明住地最為大力。(大正二二・二二〇上)。

④7 無学と仏果について、『大般涅槃經集解』の宝亮説がある。

宝亮曰。第六功德。以金剛三昧為体。金剛三昧即一切智。于時集諦累尽。体由是苦無常。苦果亦謝。無学仏果、任運而來。則金剛心時、始功用心滿、名為学仏、不得称無学。所以說金剛衆定之極。(大正三七・五三〇上)

④8 慧遠の時代には『十住經』(鳩摩羅什訳)、六十卷『華嚴經』(仏駄跋陀羅訳)「十地品」と『十地經論』がある。ここでは『十住經』の文が挙げられる。

十地菩薩皆滿其中。譬如稻麻叢林。是諸菩薩。有無量無辺業。修習菩薩功德智慧禪定。於如来功德智慧力。百分不及一。百千萬億分不及一。乃至算数譬喩。所不能及。

(大正一〇・五三一中)

また、『十地經論』の対応箇所は大正二六・一九九下となり、『華嚴經』「十地品」の対応箇所は大正九・五七四中となる。

④9 大竹晋「地論宗の煩惱説」、金剛大学校仏教文化研究所編『地論宗の研究』、二〇一七年、一三七—一九〇頁。

⑤0 菩薩字者、等覺性中一人。其名金剛慧幢菩薩。住頂寂定。以大願力住寿百劫。修千三昧已入金剛三昧。同一切法性二諦一諦一合相。復住寿千劫学仏威儀。象王視觀師子遊歩。復修仏無量不可思議神通化導之法。是故一切仏法皆現在前。入仏行処坐仏道場超度三魔。復住寿万劫化現成仏。入大寂定等覺諸仏二諦界外。

(大正二四・一〇二二—一〇二三上)

⑤① 地論教学の煩惱説は四住地惑を煩惱障とし、異心の惑であるとい
い、無明住地惑を知障(所知障)とし、即心の惑であるともなされ
ている。また、煩惱障を見道で対治するといひ、所知障を修道で対
治すると捉えられている。池田将則「二〇一七」前掲書。大竹晋
「二〇一七」前掲書。

⑤② 小乘法中、通別有五。一、簡聖異凡。見道已上、無漏聖慧、能破
難壞、通名金剛。二、簡修異見。唯取修道対治無礙、以為金剛、余
者皆非。三、簡上異下。如『雜心』説、唯非想地、見修無礙、是其
金剛、余者皆非。四、簡勝異劣。如『雜心』説、唯非想地、修道無
礙、以為金剛、余者皆非。五、簡終異始。唯非想地、修道治中、末
後一治、是其金剛、余者皆非。以此窮終、破障畢竟、故偏説之。

(大正四四・六三九中—下)

⑤③ 『菩薩地持經』…菩薩最後身得快淨菩提分法。菩提樹下乃得満足菩
薩最後身。修三十七菩提分法得衆相。離障三昧金剛三昧所攝。

(大正三〇・九五八下)。

⑤④ 『金剛般若經義疏』は吉蔵撰『金剛般若波羅蜜經』の註釈書であ
る。ここでの金剛心義は『金剛般若波羅蜜經』に基づくのである。

⑤⑤ 崔鉉植校注・慧均撰『大乘四論玄義記』、仏光社、二〇〇九年、
三二—三三五頁。

⑤⑥ 問曰、別教經論、何故有処明法雲之後、更有金剛等覺。自有經
論止明十地行滿、便成仏果。南北法師抑諍此義。

(大正四六・七五九下)